









ヲ比較商量シ以テ精密ノ貨幣ヲ鑄造シ頗ル今日ノ善美  
ヲ盡スニ至ル實ニ經濟ノ要旨ニ適シ人民ノ幸福亦大  
ナリト謂フヘシ獨リ憾ム金銀器物ノ如キニ至テハ依然  
トシテ之ヲ改良スルノ方法アラサル也抑金銀器物ノ貴  
重ナル所以ハ專ラ其性質種類ノ純良粹美ナルニ在リ而  
シテ今ヤ人民逐日開化ノ域ニ進ミ工業ノ道漸ク擴充セ  
ントスルニ際シ猶或ハ混淆難駁ノ金銀器物ヲ以テ純粹  
ノモノトナシ其間奸商黠工アリテ妄リニ人目ヲ眩惑ス  
ルノ弊亦タ尠カラス况ヤ近來白銅アルミニウム等殆  
ト金銀ニ類似スルノ金屬ヲ發明シ之ヲ器物ニ製セント  
スルノ秋ニ際スルニ於テヤ其之ヲ以テ金銀器物ト相  
誤ラシムルモ亦計ルヘカラス則チ豫メ此等ノ弊ヲ防キ  
且貨幣ト均シク從前因襲ノ弊ヲ除カサルヘカラス苟モ

此弊ヲ防キ此弊ヲ除カントスルヤ則チ以テ金銀検査所  
ノ設置ナカルヘカラサル所ナリ夫此局ノ事務タルヤ金  
銀ノ器物ヲ検査シ品位ヲ勘定シ其品位正當ノ品物ヲ有  
スルハ恰モ眞貨ヲ有スルト同シキヲ保證スルモノナリ  
往昔英國ニ於テ金銀器物ノ製作師輩相協同シテ會社ヲ  
結立シ金銀器物取締ノ方法ヲ設爲スルニ創マル之ヲ号  
シテ「ゴールドスミスホール」ト云フ而シテ其政府ヨリ許  
可ヲ得テ金銀器物ヲ検査シ之ニ極印ヲ鈐シテ其品位ヲ  
證明スルノ權ヲ有ス爾來今日ニ至ルマテ一モ昔日ト異ナ  
ルコトナシ人民モ亦之ヲ信シ其社ノ檢印ヲ受サルモノ  
ナキニ至ル然レモ其間或ハ一弊ヲ生スル所ノモノアル  
カ佛國ニ於テハ其検査ノ權ヲシテ一ニ政府ニ屬セシム  
此法獨リ佛國ノミナラス歐洲各國概子之ヲ可トスト云



ノ故ニ我國此局ヲ設置スルヤ宜シク歐洲各國數年經驗  
ノ方法ヲ取捨シ更ニ本邦適宜ノ一法ヲ設ケ人民ヲモテ  
奸商黠工ノ欺罔ヲ受ケサラシメシコトヲ要ス當掛既ニ  
造幣ノ事務ニ擔當ス復タ金銀ノ事ニ與カラサルヲ得ス  
因テ當掛ノ負ヲシテ金銀検査所閑立ノ方法規則ヲ洋籍  
ニ徵シ其方策ヲ講セシメ以テ他日<sup>\*</sup>請フ所アラントス

金銀検査局開設ノ管見

金銀検査所ノ國家ニ必要ナルノ事ハ臣泰曩キニ豊原百  
太郎氏カ譯述セシ金銀宝鑑ト題スル一書ニ梓行スルノ  
日同氏ノ囑ニ因テ之ヲ校閲スルニ當テ私カニ其卷端ニ  
微意ノ寓シ且先覺ノ譏ヲ述フルノミナラス石丸安世君  
カ造幣権頭ニ任セラレシノ際同君ノ下問ヲ辱フニ復タ  
聊カ鄙意ヲ因陳シ俟ニテ金銀検査所ノ事ニ及ヘリ其言  
タルヤ固ヨリ孟浪無稽ニシテ自ラ揣ラサルノ甚ニキ退  
テ其非ヲ悔ユ實ニ一片ノ杞憂ノミル来默止スルコトニ  
久シ頃日東京府下高某アリ金銀箔粉ノ事ニ就テ請求ス  
ル所ノ建議書ヲ出セリ主任其請求ヲ以テ許ス可カラサ  
ルモノトナシ豫メ之レヲ臣等ニ合議ス臣泰乃チ某ノ主  
旨ヲ閱スルニ到底私利ヲ謀ルニ過キサルモノ、如シ故



ニ果然トシテ主任ノ議ニ同意セシト虽氏然レ氏某ノ建  
議中旧幕府ニ金銀検査所ニ類似スルモノアリシ事ヲ述  
フルヲ見テ忽チ前日ノ杞憂復タ生シ止マント欲シテ能  
ハス終尊蒙ヲ冒シテ敢テ閣下ノ左右ヲ煩ハサントス抑  
モ金銀検査所ナルモノハ旧幕府ノ政治上猶之レニ類似  
スルモノアリトセハ則チ今日開明ノ隆世廣ク宇内各國  
ト交通セラレハ際豈此舉ヲ緩フスヘキノ理アル可ケ  
ニヤ其國家人民ノ保護ニ必要ナリ既ニ閣下ノ親シク臣  
泰ニ高示セラレ、所臣泰亦何ヲカ之レヲ贅セシ但私カ  
聞ク方今我國分折ノ術未タ精シカラス世其主任ニ急  
シキヲ以テ此舉ニ及フ能ハスト固ニ然ラン然レモ凡ソ  
世ノ物ヲ處スル或ハ其人アリテ而後其局ヲ設クルアリ  
或ハ其局ヲ設ケテ而後其人ヲ得ルアゾ故ニ苟モ其國家

ニ必要ナルモノナリトセハ須ラク其備ヲナシ其人ヲ求  
テ仮令充分ナラサルモ先ツ其局ヲ開テ以テ漸次之カ精  
密ニ至ルヲ待ツヘキモノアリ則チ金銀検査所ノ如キハ  
益ニ其類ニ属スヘシト信ス因テ私カニ案スルニ方今造  
幣寮ニハ精製分折所アリテ其主任亦漸熟達シ紙幣寮ニ  
於テモ曩キニ米人アンチセル氏ヲ傭聘シテ漸分折ノ事  
ヲ開キシト聞ク其間從此必ス畧其任ニ堪ユルノ人アル  
ヘシ故ニ目下二三名ヲ撰テ委員トシテ金銀検査所ヲ設  
クルノ方法ヲ講究セシメ東京大坂ノ兩府ニ於テ此舉ア  
ルヲ要スルトキハ則チ全國ニアラユル金銀ヲ保護スル  
亦敢テ難キニアテサルヘシ井蛙ノ管見或ハ譴怒ニ觸レ  
ン丁ヲ恐ルト虽氏一片ノ杞憂黙止スル能ハス敢テ電覽  
ヲ汚ス多罪々々伏願閣下吐握ノ餘暇幸ニ鄙衷ヲ悞察セ

七  
表  
省



ラレニトテ 臣 泰 誠惶誠懼謹白

明治九年三月廿一日

權大録島邨 泰

遠藤大藏大丞閣下

頃首頃首謹テ書ヲ閣下ニ奉ス熟惟ルニ金銀ノ物タル  
ヤ特異ノ美性ヲ具有ニ人ノ尊重ヲ受クル天下何物カ  
之ニ加ヘンヤ是レ皆人ノ知ル所ニテ今又之ヲ辨ス  
ルヲ待タス之ヲ小ニシテハ生民ノ豊富ヲトシ之ヲ大  
ニシテハ國家ノ富强ヲ稱スル唯々其レ之ニ由ルノミ  
然ルニ我國未タ分析ノ術ニ精カラサルヲ以テ此クノ  
如ク貴重ナル金銀ノ純駁ヲ明瞭ニスルモノ幾シト希  
ナリ豈ニ憾マサルヘケンヤ況ンヤ東京市中ノ如キハ  
金銀ノ工作ヲ以テ業トナシ又之レヲ販鬻スルノ商賈  
タルモノヨモ多シト虽モ多ク奸工黠商ニシテ而モ素  
ヨリ其性質ノ良否ヲ辨知スルノ欲セス好テ偽ヲ以  
テ偽ヲ傳ヘ人已ヲ騙キ已レ亦人ヲ騙キ以テ之ヲ快ト  
ス其弊極マルト云ヘシ故ニ其職工タルモノ此ノ如キ



尊重無以ノモノノ空ク耗消シ亦商賈タルモノモ猥リ  
ニ之カ販鬻ヲナシ其実價損スルコト以々是ナリ実ニ  
國家ノ大害ト云マヘシ又東京以北ノ住民ハ造幣寮ノ  
何物タルノ辨知セサルカ故ニ地金ヲ所藏シテ之ヲ貨  
幣ニ鑄造スルヲ考思セス偶事由ヲ知リテ而シテ所有ノ  
地金ヲ以テ貨幣ニ改鑄セント欲スルモノアルモ道路  
隔絶遮送ノ便ナラサルヲ憂ヒ且ツ費用ノ多カラシコ  
トヲ厭ヒ後ニ庫中ニ蓄藏シ以テ珍宝トナシ敢テ之ヲ  
改鑄セズ因循地金ニ均シキ旧金銀ヲ秘藏スル實ニ慨  
嘆ニ堪ヘサル所ナリ因テ思フ東京地方ニ精製分析所  
ヲ設置シ諸工作物ニ用ユルトコロノ金銀地金ハ豫メ  
一般ノ品位ヲ定メ置キ隨テ人民ヲシテ之ヲ秘藏シテ  
珍トナシ宝トナストコロノ金銀器物ノ品位ヲ精定ス

ルヲ申願セシタルノ策ヲ立テ而シテ人民相争相競テ以  
テ其精製ヲ乞フノ奮志ヲ真起セシメ而シテ之ヲ精製分  
析シテ其品位ヲ確定シ金銀器物ノ真正ナルヲ証シ以  
テ之ヲ本人ニ交付ス而シテ之ヲ他物ニ改作シ亦之ヲ宝  
藏スル唯其好ムトコロニ任ス又造幣ノ為メ輸入スル  
地金ヲ受テ其品位不明ナルモノハ造幣寮ニ於テ処置  
スルトコロノ章程ニ照シテ之ヲ精製分析シ純粹ノモノ  
トナシ以テ之ヲ收納シ國債寮ニ照會シ而シテ同寮保守  
スルトコロノ準備金ヲ貸受モ二十日間ニ之レヲ拂渡  
シ而シテ地金ノ便宜ヲ以テ造幣寮ニ運送シ貨幣トナシ  
國債寮ニ收納シテ前キノ準備金ヲ消却シ且ツ單ニ買  
上ヲ願フトコロノ地金ノ品位未定ナルモノハ之ヲ精  
製シテ其品位ヲ定メ然ル後之ヲ國債寮ニ買上ケ又其



品位確定ノ地金ヲ請求スルモノアレハ之ヲ賣下クヘ  
ニ然レハ則テ官民共ニ其利便ヲ得後其品位ヲ辨セ  
ス妄リニ金銀ノ細工ヲ作シ其耗消ヲ為スノ弊ヲ絶テ  
又販鬻ノ際其欺妄ヲ逞スルノ患ヲ除キ人民ヲシテ其  
尊重スヘキ所以ノ真理ヲ察知モ空ク地金ヲ庫中ニ  
貯藏スルノ旧習ヲ脱去セシメハ其宝器ニ非サルモノ  
以テ宝器トナシ其地金ニ均レキモノヲ尊シテ之ヲ秘  
藏スルノ僻習全ク消滅シ人民ノ眼目益々開明ニ至リ  
始メテ分析術ノ緊要ナルヲ知り其品位不明ナル金銀  
器物ヲ有スルモノハ之カ精製分析ヲ申願シ又地金ヲ  
有スルモノハ之ヲ貨幣ニ改鑄シ以テ通宝トナシ  
トヲ冀望スルニ至ラント信ス因テ願クハ政府先ツ之  
ヲ誘導スルノ道ヲ開カシタメ東京ニ於テ一地ヲ撰

ニ精製分析場ヲ開立セシメテ其精製ノ鄙言敢テ陳スル  
ニ足ラスト虽凡心思止ク能ハス妄ニ吐露シテ以テ威  
尊ヲ冒瀆ス伏メ願クハ區々ノ微衷ヲ憐ミ之ヲ採用ア  
ハ臣等敢テ鉄鉞ヲ避ケサルトコロナリ誠恐誠惶頓  
首死罪

明治九年九月

十三等出仕林為理  
十三等出仕是洞能類

大谷大藏權少丞殿



獻芹

夫レ貨幣ハ國ヲ富マスノ一器ナリ其貨幣ヲ鑄造スル  
ハ金ヲ以テ第一等トシ銀之レニ亞キ銅又其次ニ居ル  
ハ各國普通ノ制ナリ而シテ方今我國ノ貨幣海外ニ輸  
出スルモノ年ハ一年ヨリ多ク前日鑄造セシ所ノモノ  
將サニ此國ヲ去テ他ニ流出ニ尽サントス如斯ニシテ  
数年ノ経バ終ニ日本皇國ノ人民金貨ノ所在ヲ見ル  
能ハサルニ至ラニ嗚呼實ニ皇國ノ爲ニ臣等カ切齒慄  
慄スル所ニシテ夙ニ之レヲ豫防スルノ策ヲ設ケズニ  
ハアルベカラサルナリ於是乎世ノ論者既ニ謂ヘル  
リ曰ク金貨ノ濫出ヲ防クハ國產ヲ増殖スルニアリト  
果シテ然リ而シテ此法殆ント相立チ諸方漸ク着手ス  
ルヲ見ルト虽凡其資本タル貨幣ニ乏シキヲ以テ常ニ



遺憾ヲナスモノ多シ故ニ臣等ハ首トシテ之レヲ輔賛  
スルノ媒介タル貨幣ヲ増殖スル方案ヲ議セントス抑  
モ現今人民ノ所有スル古金銀貨幣及ヒ諸器物等ノ地  
金空ク庫中ニ埋没スル所ノモノ猶少ナシトセス今此  
ヲミテ貨幣トナサシムルハ最モ今日ノ急務ニシテ之  
レヲ施行スルノ方法ヲ擴充セサルヘカラス蓋シ夫ノ  
金銀精製分折所ヲ東京ニ分立シ此局ニ於テモ造幣寮  
ノ如ク人民ヨリ差出ス地金ハ其量些少ナリト虽<sub>豫</sub>  
メ<sub>「テ</sub>エツキアツセイ<sub>」</sub><sup>試験</sup>ヲ要セシ上位<sub>分折</sub>適當ナルモノ  
ヲ得テ之ヲ領收シ<sub>」</sub>内地人民ハ東京ニアル三井組外國  
人民ハ横濱ニアル東洋銀行ノ手ヲ經ル<sub>」</sub>造幣規則ノ  
大坂三井組神戸東洋銀行ト同様タルヘシ<sub>」</sub>總テ造幣規  
則ノ通り二十日目に至リ之レニ代フル所ノ貨幣ヲ拂

フベキ旨ノ令狀ヲ渡シ置キ其期日ニ至リ一時準備金  
ノ内ヲ以テ操替ヘ渡シ其地金ノ大凡造幣規則ノ量目  
ニ充ルヲ待テ大坂ニ送附シ漸次大坂ヨリ貨幣ヲ運送  
スルニ及テ準備金ニ辨償スルヲ例トナスヘシ若シ此  
法ヲ施ス時ハ東國ニ居住シ地金ヲ所有スルモ従来運  
搬ノ手数ヲ厭フノミナラス其地金ノ量充分ナラサル  
カ為メニ未タ之レヲ貨幣ニ鑄造スルヲ得サルモノ初  
テ其憂ヲ解キ容易ニ地金ヲ差出ス<sub>」</sub>ヲ以テ庫中閉塞  
スルモノ忽チ世ニ公出シ隨テ物産増殖ノ資本トナル  
モノ多カラシテ此局ヲミテ曾テ同僚島邨泰等カ  
建議セシ所ノ<sub>」</sub>ゴールドミス、ホール<sub>」</sub><sup>金銀</sup>ヲモ兼子  
ニメ<sub>」</sub>凡ソ國中ニ製造スルノ金銀器物等ハ總テ詳カニ  
普通ノ制<sub>」</sub>ニ以較<sub>」</sub>商量<sub>」</sub>ニ以テ品位若干位ト定メ人民



ノ金銀細工ヲナスモノハ皆此局ニ出シテ検査ヲ請ハ  
シメ其手数料若干ヲ納メシム此ノ如クスルキハ金銀  
ノ品位ヲ一定ニ姦曲欺罔ヲ防ク耳ナラス世人自ラ金  
銀ノ貴重スヘキ所以ヲ熟知シ容易ニ之ヲ耗消セス亦  
隨テ眼前ノ私利ニ泥ミテ之ヲ海外ニ濫出スル丁ナク  
之レヲ以テ物産増殖ノ資本トナスニ至ラン或ハ謂ハ  
シ金銀検査所ヲ設クルモ未タ其任ニ堪ユルモノアラ  
スト是レ徒ニ其備ハラントヲ求クルノ甚シキモノニ  
シテ何ッ其人ヲ輩出セシムルノ策ヲ立サルヤ試ミニ  
即今他ノ諸新業ヲ見ヨ蓋シ一モ未タ整然タルモノヲ  
見スト虽モ夙ニ其所ヲ設クルニ因テ漸次其人ヲ輩出  
スルニアラスヤ然ルニ今其人ナキヲ以テ之レヲ他日  
ニ附ミテ問ハサルトキハ不知何レノ日カ其任ニ堪フ

ルモノアラシヤ故ニ此一舉ノ如キモ先ツ其位置ヲ設ケ  
テ以テ其人ヲ輩出セシムルヲ良シトス若シ然ラス其人  
ノ輩出スルヲ待テ其位置ヲ設ケントセハ則チ數年ヲ經  
サルヘカラス其間金銀ノ濫出及ヒ之ヲ耗消スルノ弊ヲ  
奈何セン蓋シ金銀盡キテ後チ漸ク之レヲ保護スルノ道  
立タンノミ夫レ何ノ益カ之レアラシ杞憂ノ痴情不忍黙  
止敢テ吐露ス請フ姑ク臣等カ狂愚妄ニ尊嚴ヲ冒シテ僭  
越ノ言ニ涉ルヲ咎メス幸ニ別紙ニ就テ即今杞憂ノ由テ  
生スル所ヲ洞察セラル、ノ恩惠アラハ臣等死スト虽モ  
將キニ朽チサラントス敢テ斧鉞ヲ待ツ誠恐誠惶頓首謹  
。明治九年六月廿日  
十五等出仕久我好懿  
十五等出仕渡邊孝吉



大谷大藏権少丞殿

金銀鑄造發行高及輸出高比較概表 銀貨以下畧之

創業ヨリ明治八年  
十二月迄鑄造高

一金貨五千〇三拾三万八千百〇壹圓

内

輸出高千八百〇五万八千九百六拾貳圓

自明治五年  
至八年十二月

甲 差引残高三千貳百貳拾七万九千百三拾九圓

明治九年一月ヨリ  
三月迄鑄造高

一金貨拾貳万千五百五拾三圓

内

輸出高貳百五拾貳万千九拾貳圓

自明治九年一月  
至同年三月

乙 差引不足貳百三拾九万九千五百三拾九圓



右乙之比例ヲ以テ三ヶ月毎ニ甲ノ高ノ内ヨリ漸次乙  
ノ高ヲ引去リ不足ヲ補フキハ僅ニ三年四ヶ月余リニ  
シテ金貨全ク地ヲ拂ヒテ輸出スルニ至ル